

森喜朗オリ・パラ組織委員会会長の「失言」許すな

前回の「通信」で東京オリンピックの開催は、コロナ禍であり運営面などでもう難しいのではないかと、国民世論に反し、コロナ禍で無理やり開催するのは、国民の命や暮らしと引き換えにするものだと書いた。

その後、オリンピックに関連する問題ニュースが飛び込んできた。

2月3日、森喜朗オリ・パラ組織委員会会長の「失言」がそれである。その内容が瞬く間に世界中に拡散した。「女性の多い会議は時間が長い」と性差別、女性蔑視の「失言」だった。森氏は、性差別発言ではないと弁明したが、「失言」の本質は、「女性は男性に向かって軽々しく発言すべきではない。場をわかまえるべきだ」というものであった。森氏の男性優位、女性蔑視の考え方が現れたものだ。だから、この「失言」で、すぐに国内外から大きな批判が起こり、今も続いている。

問題の本質とらえた各国の反応

「いったい今何世紀?」、「彼が、女性が長くしゃべりすぎると考えるのは、彼が女性は全くしゃべるべきではないと考えているからだ」、「彼は性差別主義者だ」というものだ。そして、「失言」には「黙らないで」とツイートされている。実に問題の本質をとらえた反応だ。

そうした事態にあわてた森氏は、翌2月4日に発言撤回の謝罪会見を行った。ところが、森氏は、発言撤回と謝罪はしたものの、辞任は否定した。そして、「居直り」謝罪と言われ、かつ、自らの「失言」の問題深さを理解できていないものだったため、さらに批判を浴びる結果となった。その件で、東京都には500件以上の苦情があったという。

森氏には、「子どもをつくらない女性に税金を使うのはおかしい」などの問題発言の前科があり、女性蔑視は以前から現れていた。未だに治っていないということだ。

そもそも、女性の話が長すぎるのが本当なのかだ。このことについては、海外の大学などで研究されていて、むしろ、男性のほうが話は長くなる結果が出ているそうだ。そして、男は、権力を持つほど話が長くなるそうで、女が話すそれを遮るそうだ。

この結果は、まさに、今回の森氏の「失言」をよく物語っているのではないかと。

この森氏の「失言」について、IOCは、発言撤回と謝罪をしたことで一見落着としたそうだが、今後、影響は出てくると思う。

森組織委員会会長ではオリンピックは乗り切れない

一つは、森氏のもとではオリンピック開催は難しいと言う声の広がりである。

オリンピック精神は、男女平等であるという点において、オリンピックの顔としては、日本の恥だから、即刻辞めるべきだという声が大きくなっている。「森氏の処遇検討と再発防止を求める」オンライン署名も始められ、広がっている。

残念ながら、菅首相や閣僚、オリ・パラ組織委員会からは辞任を求める声はほとんど出ていない。義理があるからという理由で、森氏をかばう人は、政官界、メディア、スポーツ界に多いようだが、男女平等感覚、差別意識が薄いとと言える。

二つ目は、オリンピック開催への影響である。コロナ禍での開催になるので、感染リスクを心配して、中高年のボランティアの辞退がすでに出ていたが、この「失言」を機にボランティアを辞退する人が出てきたことだ。

医療従事者の確保と合わせてボランティアの確保が十分にできなければ、オリンピック開催は難しくなる。

厚労省が行った抗体検査の結果、東京都では抗体を持つ割合は、わずか0.91%だった。人口の6割から7割の人が新型コロナウイルスの免疫力を持てば、集団免疫ができると言われる。集団免疫ができない、ワクチンも間に合わないとなれば、この夏までには、新型コロナの感染は到底収まらない。

コロナ無視のオリンピック開催前提では国民が被害に遭う

ところが、森氏は、オリンピックの開催について「私たちはコロナがどういう形であろうと必ずやる」、「やるか、やらないか、という議論ではなく、どうやるか」などと語り、このコロナ禍の中でもあくまでも開催ありきで、国民不在の姿勢を示した。これに対しても、コロナの影響を受けている国民や選手のことなど考えないものだと批判が内外から起こった。

コロナ禍でもオリンピックが開かれれば、国民が元気になる、将来への希望になるとの声もある。また、選手のことを考えればどうしても開催してあげたいとの声もある。

しかし、新型コロナの感染拡大を徹底して抑え込もうとしないこの国で、重症化し、亡くなる人が後を絶たない。仕事がなくなる、営業が困難になるなど、生活に困窮する人が増え続けている。そんな中でオリンピックを強行的に開催するのは、感染を拡大するだけである。

まさしく、感染を広げた「Go To トラベル」事業と同じになるのではないか。

政治は、災害などが起こったときに、速やかに的確に判断し、全力で支援していくことが重要であるはずだ。今、国民の命と暮らしを守るために、検査拡充、医療体制支援強化、営業等への十分な補償など徹底したコロナ対策を行うのが政治の役目であるはずだが、政府・与党には、国民の惨状の実態が見えていないようだ。だから、この国は、本気でコロナ対策をやっていない。そのことに強い憤りを持つ。

今、21春闘がたたかわれている。緊急事態宣言の中、春闘の行動は制約を受けているが、行動は続けている。

改めて言いたい、オリンピックは中止を！

千代田春闘共闘は、21春闘方針案に初めて「東京オリンピックを中止し、コロナ対策に集中を」という方針を掲げ、21春闘をたたかっている。

最後に、大河ドラマ「麒麟がくる」では、最終回、麒麟は来なかった。麒麟は、泰平、平和の世に現れるという伝説の動物。麒麟を呼ぶのは、我々、働く者である、そういう気概で頑張りましょう。

(千代田区労協議長 小林秀治)

*千代田区労協通信バックナンバー／http://www.chyda-kr.org/kuroukyou_news2020.htm

※皆さんからの投稿、感想・ご意見などお待ちしております。